

## 卷頭言

この夏必要があり、所蔵図書や雑誌を確認するために、他大の大学図書館サイトを見る機会がかなりあった。その折に実感されたのが、機関リポジトリ以外のデジタルアーカイブを拡充させていく動きが多くの大学で見られることだった。さらにデジタルアーカイブの構築に、各大学の特色が現れていることも注目された。

まず規模の大きなアーカイブとしては、やはり東大のデジタルアーカイブが目に付いた。図書館の頁に並ぶ「鷗外文庫書入本画像データベース」「霞亭文庫」「万暦版大藏經」等の紹介や、経済学部のデジタルアーカイブの紹介からは、価値の高い文化資源の保存と提供への積極的な姿勢がうかがわれ、蓄積されてきた資源の規模や範囲をあらためて知ることになる。同様の印象は京大のアーカイブからも感じられ、国宝の「今昔物語集」や重要文化財40点を始めとする7000タイトルのコンテンツを収めた「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」を見れば、デジタルアーカイブのメリットを強く感じることができるだろう。国宝や重要文化財を含めたアーカイブとしては、早稲田大の「古典籍総合データベース」もあるが、「江戸文学コレクション」の他、7つのテーマで分類されるこのアーカイブからも、蓄積した文化資源を広く提供していくデジタルアーカイブの方向と価値を確認することができる。

このようなスケールの大きいデジタルアーカイブが活動する一方で、大学の専門性を活用した文化資源の提供も、一つの傾向となっている。例えば、駒澤大の「電子貴重書庫」には、道元の真蹟本を始めとして禅学関係の貴重書や仏教書を中心とした古典籍の画像が収められ、龍谷大「龍谷藏」でも仏教書を始めとする約2000タイトルの画像が公開されている。教育関係では、東京学芸大に「学びと遊びの歴史」と題したサイトがあり、多数の往来物の他、絵双六、おもちゃ絵、明治初期の教科書等が収められ、筑波大の「貴重書コレクション」でも、デジタル化された「昌平坂学問所関係文書」や庭訓往来を集めた文庫等が公開されているように、所蔵資料の特性を活かした個性的なデジタルアーカイブが築かれている。

さらに地域の文化拠点としての性格を踏まえ、多くの大学で地域資料の公開を積極的に進めていることも、傾向としてあげられる。その中には、貴重資料の画像公開だけではなく、古文書の翻刻や解説を附載した事例もあり、このような一般市民が地域の文化資産に親しむことを想定した措置からもうかがえるように、研究以外の場で活用する方向も大学のデジタルアーカイブには求められている。その一例となるのが、岡山大が岡山市と連携して「池田家文庫」の教材化を進め、公開講座や子供向けのワークショップで活用したプロジェクトで、デジタルアーカイブによる地域貢献の好例として、高く評価されることとなった。

この地域資料の収集蓄積の方向に関連して、文化資源の保存提供といった大学のデジタルアーカイブのイメージに、新たな色彩を与えるアーカイブの出現も注目される。例えば神戸大「震災文庫」や東北大「みちのく震録伝」のような震災記録を網羅的に収集し、広く発信していくアーカイブからは、大学が作るアーカイブの新たな可能性が見出せる。海外を含め100以上の機関と連携して、東日本大震災以外の災害記録も収集する「みちのく震録伝」は、研究の成果を今後の災害の対策に活用していくというミッションを掲げている。大学のデジタルアーカイブは、従来からの役割である学術資源の保存と公開の方向を追求しつつ、新たな相貌も獲得していくと思われる。

(Y.I)